Johann Sebastian Bach

第21回 県民合唱団定期演奏会

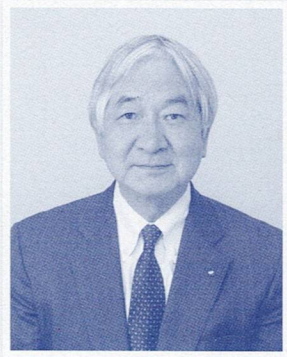
バッハ「ミサ曲ロ短調」

2015年2月22日(日)
14:00開演

千葉県文化会館
大ホール

主 催：公益財団法人千葉県文化振興財団
後 援：千葉県
協 力：千葉県合唱連盟、市川交響楽団

ご挨拶
Greeting



公益財団法人千葉県文化振興財団
理事長　**髙木　健一**

今年の冬は寒さの厳しい日が続きましたが、ようやく暖かく柔らかな日差しに包まれ、春の訪れが感じられるようになりました。

本日は、「第21回県民合唱団定期演奏会」にようこそおいでくださいました。

これまで、この演奏会では、ヘンデルの「メサイヤ」、モーツァルトの「レクイエム」など宗教曲をテーマに取り組み、県民参加型事業の重要な公演として実施してまいりました。

早春の風物詩ともなった本演奏会は、おかげさまで昨年度20回の節目を数えることができました。これまで続けてこられましたのは、熱心にご指導いただく合唱指揮の先生方、意欲的に取り組んでくださる合唱団員の皆さまをはじめとする方々のお陰だと心から感謝しております。

県民合唱団は、現在では約1000名が登録する県内最大規模の合唱団にまで成長することができました。本日の演奏会では、バッハ最後の大曲「ミサ曲ロ短調」に挑戦いたします。地域や世代を超えて集まった合唱団員は、合唱指揮の井辻紀一先生のご指導のもと、7月から30回の練習を重ねてまいりました。

本日は、三原明人先生の指揮のもと、今回の演奏会のために特別編成されました千葉交響楽団協会オーケストラの演奏で、総勢300名の出演者が皆さまに素晴らしいひとときをお届けいたします。

ソリストには、盛田麻央さん、渡部菜津美さん、中嶋克彦さん、菅谷公博さんの4人にご出演いただきます。素晴らしい歌声は、ホールいっぱいに高らかに響き渡ることでしょう。

最後に、演奏会の開催にあたり、ご指導ご協力いただきました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

それでは、合唱とオーケストラが織り成す美しく壮大なハーモニーをごゆっくりと心ゆくまでお楽しみください。

プログラム
Program

J. S. Bach
Messe in h-moll
BWV232

I. Missa

休　憩

II. Symbolum　Nicenum

III. Sanctus

IV. Osanna, Benedictus,
Agnus Dei et Dona nobis pacem

指　　揮／三原　明人
ソ リ ス ト／盛田　麻央（ソプラノI）
渡部　菜津美（ソプラノII&アルト）
中嶋　克彦（テノール）
菅谷　公博（バス）
合　　唱／県民合唱団
管　弦　楽／千葉交響楽団協会オーケストラ
合 唱 指 揮／井辻　紀一（千葉県合唱連盟顧問）
練習ピアニスト／柳井　和泉
塩澤　景子

プロフィール
Profile

三原 明人（みはら あきひと／指揮）

Akihito Mihara

1961年東京生まれ。東京藝術大学でヴィオラを専攻、その後桐朋学園とウィーン国立音楽大学で指揮法を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、カール・エステルライヒャー、ヴァーツラフ・ノイマン各氏に師事。さらにイタリアでゲンナジ・ロジェストヴェンスキー、モーシェ・アツモン、ドイツでベリベルト・バイセル各氏に師事。1989年オランダで行われた「第2回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」第2位、1993年ドイツ・ハレで開かれた若手指揮者育成のための「DIRIGENTEN　FORUM」で最優秀ファイナリスト、1996年ポルトガルで行われた「第8回リスボン国際青年指揮者コンクール」第3位（1位なし）入賞。

1989/1990のシーズン、ウィーン・フィルのコンサートでレナード・バーンスタインのアシスタントを務め、1991年よりオペラ作品などで外山雄三、広上淳一各氏のアシスタント、1996年ベルリン・フィル来日公演でクラウディオ・アバドのアシスタントを務めるなど研鑽を積みながら、ヨーロッパと日本を中心に活動。これまでにオランダ放送フィル、ドイツ・ハレ国立フィル、ブダペストMAV響、リスボン・メトロポリタン管、フィンランド・クオピオ響、ブルガリアの名門ソフィア・フィル、読売日響、東京都響、日本フィル、東京フィル、東京交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、神奈川フィル、名古屋フィル、オーケストラアンサンブル金沢、大阪センチュリー響、広島交響楽団、佼成ウィンドなどを指揮して、コンサート、テレビ、ラジオなどへの放送録音、CD・映画音楽製作など各方面から高い評価を得ている。特に京都フィル定期では、ビニャオのマリンバ協奏曲日本初演のほか、武満の「トゥリー・ライン」、シェーンベルクの室内交響曲を指揮し、各誌で絶賛された。1991年には愛知県立芸術大学管弦楽団指揮者として、現在は東京音楽大学指揮科及び同付属高校で、後進の育成にも務めている。

盛田 麻央（もりた まお／ソプラノ）

Mao Morita

国立音楽大学声楽科卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所第52期マスタークラス修了。修了時に優秀賞及び奨励賞受賞。パリ・エコール・ノルマル音楽院、及びパリ国立高等音楽院修士課程を満場一致の最優秀の成績で卒業。

第17回日仏声楽コンクール第1位、及び竹村賞受賞。第12回東京音楽コンクール第2位、第33回飯塚新人音楽コンクール第2位、第8回エレーナ・オブラスツォヴァ国際ヤングオペラコンクール第3位など数々のコンクールで入賞。

「フィガロの結婚」スザンナ、「魔笛」パミーナ、「ヘンゼルとグレーテル」グレーテル、二期会「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ他、多数のオペラに出演。ベートーヴェン「第九」、モーツァルト「ハ短調ミサ」、ブラームス「レクイエム」等のソリストも務める。二期会会員。

渡部 菜津美（わたなべ なつみ／アルト）

Natsumi Watanabe

船橋市出身。東京音楽大学声楽演奏家コース卒業。

これまでに、渡部成哉・川上洋司・井坂惠の各氏に師事。市川市文化会館第20回新人演奏会オーディションで優秀賞を受賞し、披露演奏会に出演。

オペラでは、プッチーニ「修道女アンジェリカ」オスミーナ役、ジョルダーノ「アンドレア・シェニエ」ベルシ役、モーツァルト「フィガロの結婚」ケルビーノ役、ビゼー「カルメン」タイトルロール役などを務める。

また、J.S.バッハ「カンタータ」、「小ミサ曲 イ長調」、「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、モーツァルト「ミサ・ブレヴィス ニ長調」、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」、ベートーヴェン「第九」などの、いずれもアルト・ソロを歌うほか、様々な演奏会に出演。

現在、二期会準会員、東京音楽大学声楽（合唱）研究員、新都民合唱団ヴォイストレーナー。

中嶋 克彦（なかしま かつひこ／テノール）

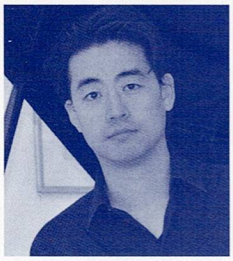
Katsuhiko Nakashima

東京藝術大学大学院修士課程修了。同大学院博士課程修了、博士号取得。2012年より文化庁在外派遣研修員としてドイツに1年間留学、マインツ音楽大学にて研鑽を積んだ。

これまでにJ.S.バッハ『マタイ受難曲』『ヨハネ受難曲』『クリスマスオラトリオ』等のエヴァンゲリストをはじめ、ヘンデル『メサイア』、ハイドン『四季』『天地創造』、モーツァルト『レクイエム』『ハ短調ミサ』、ベートーヴェン『第九』『ミサ・ソレムニス』、メンデルスゾーン『パウロス』『讃歌』、ドヴォルザーク『スターバト・マーテル』、オルフ『カルミナ・ブラーナ』等のソリストとして多数出演した。近年では海外においてもヨーロッパを中心にコンサートや宗教曲のソリストとして活躍の場を広げている。バッハ・コレギウム・ジャパン、声楽アンサンブル「ラ・フォンテヴェルデ」のメンバーとして国内外の演奏会や録音にも参加している。

オペラにおいては、第50回藝大オペラ定期公演モーツァルト『コシ・ファン・トゥッテ』のフェルランド役でデビュー。その後、新国立劇場や東京室内歌劇場をはじめ様々な舞台に出演している。

菅谷 公博（すがや きみひろ／バリトン）



Kimihiro Sugaya

千葉県茂原市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。卒業時にアカンサス音楽賞・同声会賞を受賞。同声会新人演奏会に出演。桐朋学園大学音楽学部研究科修了。2012年渡独。カールスルーエ音楽大学大学院声楽科修了。

第21回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール優秀賞。第15回コンセール・マロニエ第3位。

オペラではモーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』騎士長、『フィガロの結婚』フィガロ役を、コンサートではベートーヴェン『第九』、モーツァルト『レクイエム』、J.S.バッハ『マニフィカート』、多くのカンタータなどのソリストを務める。

県民合唱団（合唱）

The Chiba Prefecture Chorus

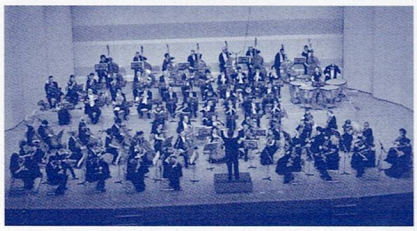
「県民合唱団」は、平成6年に、合唱活動が盛んな千葉県においてその産声を上げ、以後、ヴェルディ作曲「レクイエム」、ヘンデル作曲「メサイア」など、大曲と呼ばれる作品に挑んでいる。

現在、県内各地から約1000名の合唱団員が登録しており、千葉県文化会館や千葉県東総文化会館を活動の拠点として練習に励んでいる。

21回目を迎える今回は、ヨハン・セバスチャン・バッハの作品「ミサ曲ロ短調」に挑戦する。昨年7月から練習を開始し、千葉県合唱連盟の井辻紀一先生の熱心なご指導のもと、約8か月間に渡り30回にも及ぶ練習を重ねてきた。

また、セミナーを開催し歌うだけでなく作品の歴史や背景を学び、曲の持つイメージを大切にしている。いきいきとした表情で歌い上げる壮大なステージをお楽しみください。

千葉交響楽団協会オーケストラ（管弦楽）



Chiba Symphony Orchestra Association

千葉交響楽団協会は千葉県内で活動するアマチュアオーケストラ24団体で構成する組織です。

各団体はそれぞれ年2～3回の定期演奏会を開催していますが、「県民合唱団定期演奏会」には協会の推薦団体が隔年で参加しています。

今回は千葉県の西端にある市川市を本拠地に活動している「市川交響楽団」を中心に特別編成したオーケストラが出演しています。

市川交響楽団は昭和26年（1951）に初代理事長村上正治先生が「クラシック音楽の喜びをより多くの人に伝えたい」という理念のもと創立され、アマチュアとしては全国有数の伝統を持つ音楽団体で、創立以来63年間にわたり演奏会、地域施設訪問演奏などで地域音楽文化の振興に励んでいます。

来年、平成28年（2016）8月には千葉交響楽団協会が主管となり、全国のアマチュアオーケストラメンバーが参加して研修と成果発表の演奏会を行う「第44回全国アマチュアオーケストラフェスティバル」が千葉県松戸市「森のホール21」で開催されます。

市響ホームページ　http://ichikyo.org/index.html

井辻 紀一（いつじ きいち／合唱指揮）

Kiichi Itsuji

武蔵野音楽大学声楽科卒業。東京少年少女合唱隊の創立第1期生として入隊。以来、創立者である故長谷川新一氏の下で高校卒業までの8年間、グレゴリオ聖歌、中世ルネッサンス合唱音楽、バロック音楽等の薫陶を受ける。声楽を菊地初美、飯山恵巳子の各氏に師事。合唱指揮法を長谷川新一、栗山文昭、栗野弓子、渡辺三郎、渡邊顕麿、関屋晋、橋本周子の各氏に師事。

県立千葉東高校教諭時代に、同校音楽部をNHKコンクールにおいて10年連続千葉県代表に育てる。

その間、関東甲信越代表として3回、全国コンクールに出場。また、全日本合唱コンクールでは8年連続、関東大会に出場。その後、赴任した県立幕張総合高校においても同校合唱団を定年退職までの9年間、連続して関東大会に出場させ、創部2年目にして全日本合唱コンクール全国大会高校A部門で銀賞を受賞。

平成12年、平成16年には全日本合唱コンクール一般の部で、アンサンブル・シャロンを指揮し全国大会出場を果たす。平成13年2月には、教え子たち約100名の手による「井辻紀一先生退官記念演奏会」が開催された。平成13年3月に定年退職した後も、県民合唱団の指導など精力的に活動している。

平成16年には、これまでの活動に対し、鮫島有美子女史と共に千葉県文化功労賞を受賞。

現在、千葉県合唱連盟顧問、船橋市合唱連盟理事長、日本合唱指揮者協会会員、アンサンブル・シャロン、夏見グリーンコール、東総女声合唱団、コーロ・フィオーレ指揮者。

合唱団メンバー
Chorus member

【ソプラノ】

合原　博子	小田部　真紗子	佐藤　京子	武若　和子	本澤　葉留美
相原　斂子	片桐　美和子	佐藤　冨貴子	多田　史青	松浦　広子
阿部　和子	加藤　時江	三宮　美弥子	橘　光子	松山　裕子
安倍　順子	金塚　由美	志澤　留美子	田中　正江	三浦　昌代
荒木　富美子	柄崎　曙美	志知　京子	田村　希代子	道中　邦子
荒武　典子	川崎　徳代	實形　勢津子	丹地　佐知子	南田　啓子
市川　澄子	菊池　照子	篠塚　以久子	鶴田　恭子	矢野　博子
市原　清子	菊池　真知子	芝原　千恵子	鶴見　正代	矢部　雪子
伊藤　佳奈子	木原　えま	清水　佳生子	堂腰　伸子	山形　三代子
伊藤　タヱ	木村　絢子	下泉　寛子	鳥飼　百合子	山越　双美
稲澤　貴子	金原　秀子	白井　洋子	中島　広子	山崎　恵子
入江　弘子	久保田　知子	菅原　栄子	長田　道子	山下　文子
岩崎　麻美	久保田　睦美	菅原　聰子	浪川　弘子	山田　裕子
岩渕　東子	久保田　順子	鈴木　昭子	新沼　友子	山田　幸子
大木　松子	釼持　昭子	鈴木　和子	西村　眞知子	山本　律子
大隅　裕子	小林　知江子	宗　陽子	布村　路易子	吉岡　朗子
太田　渥子	小山　信子	相馬　美津恵	野村　妙子	米倉　まり
太田　美穂子	齊木　喜子	髙木　美智恵	橋野　治子	和田　暁子
大塚　亜矢子	齋藤　美佐子	高木　美椰子	一松　明美	渡辺　チヨ
大八木　真理	坂井　伸子	高野　弘子	平野　紀子	
小川　千鶴子	酒井　靖子	髙橋　ひづる	藤田　多恵子	
奥平　友子	佐々木　美津子	髙橋　玲子	藤森　照子	
小熊　美恵子	佐田　あかね	田久保　信子	古川　優子	
小田島　純子	佐竹　玲以子	竹内　友紀子	細羽　礼子	

【アルト】

秋葉　秋子	伊藤　和子	遠藤　鏡子	大西　静枝	葛城　松子
石井　惠美子	伊藤　瞳	大澤　英子	岡茂　ゆかり	木村　久子
石渡　百合子	岩本　悦子	太田　朱美	押沢　裕子	栗木　信子
市原　和子	鵜飼　惠子	大藤　公子	小髙　せつ	栗田　浩子

小池　いつ美
小島　俊子
小宮山　八重
斉藤　弘美
斉藤　善子
斉藤　伶子
貞元　正子
佐藤　君子
下野　幸子
菅原　妙子
髙木　弘子
高木　充子
髙橋　美津栄
田中　ゆり子
田村　シヅヱ
徳原　恵子
鳥越　頼子
中　益枝
中川　千佳子
中舘　由紀子
中津川　優理
中村　美智江
西方　みち子
西谷　幸子
西林　悌子
西本　陽子
野口　厚子
野田　宏子
畑中　久枝
服部　百合子
東　淳子
日向　信子
廣田　洋子
藤田　公子
藤原　礼美
堀内　泰江
松永　富紀子
村田　恵美子
村山　美智子
矢吹　美智子
山口　昭代
山口　恵子
山口　順子
吉岡　暉子
吉田　光子
吉田　みどり

【テノール】

石原　秀雄
板橋　憲一郎
糸久　清之
上田　茂
大谷　和男
大橋　正弘
岡部　勝弥
小田部　譲
小俣　豊彦
金子　肇
川口　宣郎
熊切　銀次郎
桑澤　文秀
佐伯　浩之
白石　孝
関戸　忍
髙嶋　富雄
髙本　敏政
田中　俊郎
土井　耕造
長井　幸男
中川　清一
中野　裕二
中山　保和
野村　和夫
原田　稔
東　節信
松藤　敏郎
松本　正
山川　央
山口　一之
山崎　行夫
山下　敏広
山田　成敏
湯川　義隆

【バス】

安達　宏治
阿部　隆之
新井　勉
荒木　清
石橋　賢二
市川　敬士
伊藤　勝利
上田　義雄
大脇　薫
大野　堯
大堀　幸三
小澤　良朗
片山　忠雄
小島　荘明
小林　秀
斎藤　常吉
坂本　恒之
関　晴臣
高田　英男
高野　脩二
堂腰　範明
難波　靖徳
西村　毅
能勢　義政
廣本　敦
藤原　久三郎
古川　賢五
松永　広光
松山　雅則
眞渕　宮樹
三浦　正樹
宮内　雅夫
宮澤　祥樹
安田　重実
吉田　隆
吉村　進太郎

千葉交響楽団協会オーケストラメンバー

Orchestra member

【コンサートマスター】

立田　祥子

【1stヴァイオリン】

石崎　俊信　大橋　一郎　鎌田　真貴　菅原　夕　秦　一宜
上田　佳津子　大橋　かおる　亀井　玲子　佐藤　薫　三野　彰久

【2ndヴァイオリン】

柴﨑　友梨　富田　八江子　早川　貴子　細貝　春　武藤　敦子
佐分利　幸江　林　美穂　久田　しげ子　溝田　範子　吉岡　一郎
滝澤　葉子

【ヴィオラ】

内田　綾美　鈴木　亜矢子　奈良林　弘子　星　乗昭　若林　繁
小名　康仁　谷口　善樹

【チェロ】

岩田　理人　猿田　諒介　野中　能久　平得　裕子　堀合　麻由美
倉澤　倫子　中村　公一　日澤　優　福原　耕二　本澤　麻理

【コントラバス】

上村　啓介　神代　順子　小林　真弓　高間　友明　番場　仙嘉

【フルート】

今井　絵理　佐藤　洋行
木村　眞諭紀　番場　ますみ

【オーボエ】

鶴田　久美子
二村　直子

【オーボエ・ダモーレ】

小梶　哲也　八木　健次

【ファゴット】

遠藤　由紀子
金坂　哲

【ホルン】

近藤　利昭

【トランペット】

秋宗　章太　田崎　真二
風早　諒彦

【ティンパニー】

和田　英恵

【オルガン】

西岡　崇

プログラムノート
Program note

文化ボランティア／大野　堯

バッハ／ミサ曲ロ短調

【作曲の経緯と構成】

プロテスタントのルター派である聖トーマス教会のカントル（音楽監督）であったバッハが、なぜカトリックの典礼用のミサを書いたのか？
この曲は、最初から1つの曲として作曲されたものではない。作曲年代から見れば4つの部分に分かれており、それぞれが独立した自筆譜として存在する。

キリエとグローリアから成る狭義の「ミサ」は、1733年（48歳）に作曲され、カトリックであるザクセン選帝候に捧げられた。これは当時ルター派のライプツィヒ市当局と抗争していたバッハが立場を有利にするために選帝候の後ろ盾を必要としていたためである。

「サンクトゥス」は、1724年（39歳）にルター派のクリスマス礼拝用に書かれたとされている。カトリックで定めるミサ通常文のサンクトゥスとは異なり、オサンナとベネディクトゥスが欠けている。

「二ケア信経」（325年と787年にカトリックのニケア公会議で定められた信条）に基づくクレドに相当する曲と、サンクトゥスを補う「オサンナ、ベネディクトゥス、アニュス・デイ、ドナ・ノビス・パチェム」は1747年から1749年（64歳---死の前年）にかけて作曲された。この時、バッハは4つの部分をまとめ、1つのミサ曲として清書した。

バッハは、晩年、眼病で視力が落ちていたが、その手術の失敗もあって、この頃にはほとんど目が見えなくなっていた。また健康状態も悪く、孫の洗礼式も欠席したほどで、音楽を聴く機会はなかったと思われる。また、当時の人々は高級なバッハの音楽を受け入れることが出来ず、彼の作品は少数の弟子によって守られたのみで、この曲も存在が長く忘れられたままになり、後年になってやっと発見・評価された。従ってバッハは、異常な意欲をもって書き上げ、後世の人々から最高のミサ曲と賞賛されることになるこの曲を自分自身で聞くことはなかったのである。

本稿の最初に書いた疑問、その確かな答えはない。バッハはプロテスタントの中でも正統的なルター主義の立場にありながら、カトリックとの交流もあったので、カトリックとプロテスタントの融合のためこれを書いたと言うのが一般的な説である。小林義武氏は、これを「エキュメニカル」な作品であると主張している。エキュメニカルとは、世界教会・教会統一という思想である。しかし、バッハは現実的な教会統合を目指していたのではない。川端純四郎氏は、ルターの言う「見えざる教会」の共通の音楽としてミサ曲を選んだのであろうと考えている。

【解説と対訳】

“第1部”　ミサ

【第1曲　合唱（5部）】
ロ短調　4分の4拍子　フルート、オーボエ・ダモーレ、ファゴット、弦楽合奏、通奏低音
<オーボエ・ダモーレ「愛のオーボエの意」は、イングリッシュホルンに近く、甘く柔らかい。>

先ず神の憐れみを乞う悲痛な叫びが感動的に歌われる（4小節）。オーケストラの前奏に続いて、息の長いフーガ主題がテノール、アルト、ソプラノI、ソプラノII、バスの順で提示され、間奏の後に再び今度は順序を変えて歌われる。これが堂々と展開される。

Kyrie eleison.　**<主よ、憐れんで下さい。>**

【第2曲　二重唱（ソプラノI、II）】
ニ長調　4分の4拍子　ヴァイオリン、通奏低音

ヴァイオリンのユニゾンと通奏低音のみの伴奏による2人のソプラノの甘美なデュエット。バロックではなく優雅なギャラント様式（ロココ様式）に近い。

Christe eleison.　**<キリストよ、憐れんで下さい。>**

【第3曲　合唱（4部）】
嬰ヘ短調　2分の4拍子　フルート、オーボエ・ダモーレ、ファゴット、弦楽合奏、通奏低音

パレストリーナから学習した古様式（スティレ・アンティコ）のフーガ。神秘的な主題が、バス、テノール、アルト、ソプラノの順に出る。

Kyrie eleison.　**<主よ、憐れんで下さい。>**

【第4曲　合唱（5部）】
ニ長調　4分の4拍子　フルート、オーボエ、ファゴット、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音

ここからGloriaとなる。3本のトランペットが加わり、華やかに神の栄光を讃える。すぐ次曲に続く。

Gloria in excelsis Deo.　**<高い天上では、神に栄光がありますように。>**

【第5曲　合唱(5部)】
ニ長調　4分の4拍子　フルート、オーボエ、ファゴット、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
前曲から続けて演奏される。ソプラノIに提示される地上の平和を願う静かな旋律が次第に声部を増して行く。最後はトランペットも加わって壮大に終わる。
Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.　<地では善意の人に平和がありますように。>

【第6曲　アリア(ソプラノII)】
イ長調　4分の4拍子　独奏ヴァイオリン、弦楽合奏、通奏低音
独奏ヴァイオリンとソプラノ・ソロが絡み合いながら神を賛美する。トリル(装飾音)を使った旋律が特徴的である。
Laudamus te.　Benedicimus te.　<私たちはあなたを誉め讃え、祝福し>
Adoramus te.　Glorificamus te.　<崇拝し、尊敬します。>

【第7曲　合唱(4部)】
ニ長調　2分の4拍子　フルート、オーボエ、ファゴット、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
古様式の4声フーガ。途中からトランペットやティンパニが加わりクライマックスを作る。歌詞の前半(Gratias ----)と後半(Propter----)に異なるテーマが与えられ、この2つが交錯しながら進む。
Gratias agimus tibi　<私たちはあなたに感謝します。>
Propter magnam gloriam tuam.　<あなたの大きい栄光の故に。>

【第8曲　二重唱(ソプラノI、テノール)】
ト長調　4分の4拍子　フラウト・トラヴェルソ、弦楽合奏、通奏低音
<フラウト・トラヴェルソは「横向きの笛」の意で、バロック・フルートのこと>
バロック・フルート、弱音器を付けた弦楽器、そして2人のソロが掛け合いのように歌う。「父」と「子」の同一性(「聖霊」と共に三位一体)を表しているかのようである。休まずに次の曲に入る。
Domine Deus, Rex coelestis,　<神である主よ、天の主よ、>
Deus Pater omnipotens.　<全能の父である神よ、>
Domine Fili unigenite Jesu Christe.　<主である一人子、イエス・キリストよ、>
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.　<神である主よ、神の子羊よ、父の御子よ、>

【第9曲　合唱(4部)　本日は4人のソリストで演奏する】
ロ短調　4分の3拍子　フラウト・トラヴェルソ、弦楽合奏、通奏低音
前曲に続けて演奏される。合唱の切々たるフーガが人間の罪を思い、内省的な響きを奏でる。
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis. <世の罪を除き給う主よ、私達を憐れんで下さい>
Qui tollis peccata mundi, suscipe deprecationem nostram.　<世の罪を除き給う主よ、私たちの願いを聞き入れて下さい。>

【第10曲　アリア(ソプラノII)】
ロ短調　4分の3拍子　オーボエ・ダモーレ、弦楽合奏、通奏低音
オーボエ・ダモーレの前奏に続き、ソロがキリストに憐れみを乞い願う。
Qui sedes ad dextram Patris, miserere nobis.　<父の右側にお座りになる主よ、私達を憐れんで下さい。>

【第11曲　アリア(バス)】
ニ長調　4分の3拍子　コルノ・ダ・カッチャ、ファゴット、通奏低音
<コルノ・ダ・カッチャは「狩のホルン」の意で、ホルンの古楽器>
コルノ・ダ・カッチャと2本のファゴットに乗って、ソロが唯一である神の神聖さを、確信をもって歌う。次の曲にすぐ入る。
Quoniam tu solus sanctus, tu solus Dominus,　<あなただけが聖なる方であり、あなただけが主であり>
Tu solus altissimus, Jesu Christe.　<あなただけが最高の方なのですから、イエス・キリストよ。>

【第12曲　合唱(5部)】
ニ長調　4分の3拍子　フルート、オーボエ、ファゴット、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
前曲から切れ目なく入る。合唱による導入の後、フーガ主題はテノール、アルト、ソプラノI、ソプラノII、バスの順で現れ、途中ホモフォニックな部分をはさんで再び壮大なフーガとなり、全オーケストラの合奏で輝かしく第I部を終わる。
Cum Sancto Spiritu in gloria Dei Patris. <聖霊と共に、父である神の栄光のうちに。>
Amen.　<アーメン>

"第2部"　ニケア信経

第13曲から第21曲までの9曲からなるが、第17曲を中心とするシンメトリー構造になっている。
すなわち、第13曲(古い聖歌によるポリフォニーの合唱曲)と第14曲(モダンなフルオーケストラと合唱からなる曲)がそれぞれ第20曲と第21曲に対応し、第15曲(二重奏風なオブリガートと独唱による曲)が第19曲に対応する。そして中心の第16曲、第17曲、第18曲は合唱曲である。

【第13曲　合唱(4部)】
イ長調　2分の4拍子　ヴァイオリンI・II、通奏低音
5声部の合唱と2部のヴァイオリンからなる7声の古様式による堂々としたポリフォニーの曲で、グレゴリオ聖歌のクレドの旋律を使っている。通奏低音が4分音符で上行・下行音階を交互に刻み続ける。
Credo in unum Deum.　<私は唯一の神を信じます。>

【第14曲　合唱(4部)】
ニ長調　2分の2拍子　オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
最初はソプラノ、アルト、テノールの3部が前曲と同じ歌詞で歌い、次いでバスが新しい歌詞(Patrem ---)で旋律を出す。これが次第に他の声部に広がって近代的な生き生きとしたポリフォニーを作り、トランペットの輝きと共に創造主を賛美する。
Credo in unum Deum, <私は信じます。唯一の神を、>
Patrem omnipotentem, <全能の父を、>
Factorem coeli et terrae, <天と地の造り主を、>
Visibilium omnium et invisibilium. <見えるもの見えないもの全ての造り主を、信じます。>

【第15曲　二重唱(ソプラノI、アルト)】
ト長調　4分の4拍子　オーボエ・ダモーレ、弦楽合奏、通奏低音
オーボエ・ダモーレの前奏に続く2声カノン。後半で2箇所、印象的な下降音型が　弦に現れるが、キリストが天から降ったことを象徴しているようである。
Et in unum Dominum Jesum Christum, <また唯一の主、イエス・キリストを信じます>
Filium Dei unigenitum. <神のひとり子イエス・キリストを信じます>
Et ex Patre natum ante omnia secula. <そして、全ての世の前に、父から生まれた方を>
Deum de Deo, <神の中の神を、>
Lumen de lumine, <光の中の光を、>
Deum verum de Deo vero. <まことの神の中のまことの神を信じます>
Genitum, non factum, <造られずに生まれ、>
Consubstantialem Patri: <父と一体である方を私は信じます>
Per quem omnia facta sunt. <その方は、全てのものを主によってお造りになりました。>
Qui propter nos homines, <私たち人類のため、>
Et propter nostram salutem, <そして私たちの救いのために、>
Descendit de coelis. <天より下られました。>

【第16曲　合唱(5部)】
ロ短調　4分の3拍子　ヴァイオリン、通奏低音
下降する3和音は天から人への降下を暗示する。一貫したヴァイオリンのジグザグの「十字架動機」は、聖母の周りに漂う聖霊を思わせる。処女降誕の神秘性が表れている。
Et incarnatus est de Spiritu Sancto <聖霊により御体を受け、>
Ex Maria Virgine: <処女マリアより生まれ、>
Et homo factus est. <人となられた、その方を私は信じます>

【第17曲　合唱(4部 --- ソプラノIが休む)　本日は4人のソリストで演奏する】
ホ短調　2分の3拍子　フラウト・トラヴェルソ、弦楽合奏、通奏低音
苦悩を象徴する4小節のラメント・バス(半音階的に下降する4度音程)が通奏低音に13回繰り返されるシャコンヌ(変奏曲の1種)で、イエスの受難という悲しみを表現している。苦しみは大胆な不協和音で示される。最後の5小節では合唱のみが低音に沈み、死を暗示する。この曲が第2部のシンメトリー構造の中心になっていることから、バッハがプロテスタントとして十字架を重視していることが窺われる。
Crucifixus etiam pro nobis; sub Pontio Pilato, <ポンティオ・ピラトによって十字架に付けられ、>
Passus, et sepultus est. <そして苦しみを受け、葬られました。>

【第18曲　合唱(5部)】
ニ長調　4分の3拍子　フルート、オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
悲しみから一転して復活の喜びを爆発させる。中間部の終わりのバスのパートソロは印象的である。
Et resurrexit tertia die, secundum Scripturas. <そして聖書に書かれているように、三日目によみがえられました。>
Et ascendit in coelum: <そして天にのぼって、>
Sedet ad dexteram Dei Patris. <父である神の右に座られました。>
Et iterum venturus est cum gloria, <そして、栄光を伴って再び来られ、>
Judicare vivos et mortuos: <生者と死者を裁かれるでしょう。>
Cujus regni non erit finis. <このような主の国の終わりはないでしょう。>

【第19曲　アリア(バス)】
イ長調　8分の6拍子　オーボエ・ダモーレ、通奏低音
オーボエ・ダモーレの2重奏は、バッハが望んだカトリックとプロテスタントの和合の象徴とも見られる。ここから信仰宣言の対象は「聖霊」と「不変である教会」になり、曲は落ち着いて内省的となる。
Et in Spiritum Sanctum, Dominum, <そして私は主である聖霊を、>
Et vivificantem: <生命の与え主を信じます。>
Qui ex Patre Filioque procedit. <聖霊は父と子から出て、>
Qui cum Patre et Filio simul adoratur, <そして父と子と共に崇められ、>
Et conglorificatur: <そして共に讃えられ、>
Qui locutus est per Prophetas. <預言者によって語られました。>
Et unam sanctam catholicam <私は唯一の神聖な、公教徒と>
Et apostolicam Ecclesiam. <使徒による教会を信じます。>

【第20曲　合唱(5部)】
嬰ヘ短調　2分の2拍子　通奏低音
通奏低音のみを伴奏とする5声の古様式フーガ。末尾の死者の復活を期待する部分ではアダージオとなり、転調が繰り返されて神秘的な気分となる。休みなく次曲に入る。
Confiteor unum baptisma inremissionem peccatorum　<罪の赦しとなる唯一の洗礼を認めます。>
Et expecto resurrectionem mortuorum. <そして、死者のよみがえりを待ち望みます。>

【第21曲　合唱(5部)】
ニ長調　2分の2拍子　フルート、オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
前曲に引き続き演奏され、全オーケストラと合唱で力強く第2部を締めくくる。
Et expecto resurrectionem mortuorum.　<そして、死者のよみがえりと、>
Et vitam venturi seculi.　<来世での生命を待ち望みます。>
Amen.　<アーメン>

"第3部"　サンクトゥス

【第22曲　合唱(6部)】
ニ長調　4分の4拍子、8分の3拍子　オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
この曲は三聖唱の3という数字と結びついている。すなわち、トランペットとオーボエは各3本、弦楽は3部であり、3連音符が多用され、後半は3拍子である。Pleni suntからは壮大な6声のフーガとなる。
Sanctus, Sanctus, Sanctus　<聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、>
Dominus, Deus sabaoth.　<万軍の主である神は、>
Pleni sunt coeli et terra　<天地は満ちています。>
Gloria tua.　<あなたの栄光で>

"第4部"　オサンナ、ベネディクトゥス、アニュス・デイ、ドナ・ノビス・パチェム

第4部も第25曲を中心とするシンメトリー構造になっている。第24曲と第26曲がソロで対応し、両端の第23曲と第27曲が合唱となっている。

【第23曲　合唱(2群の4部合唱による2重合唱)】
ニ長調　8分の3拍子　フルート、オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
2つの合唱群が、一方はポリフォニック、他方はホモフォニックで「ホサナ(神を賛美する言葉)」と繰り返し叫ぶ。
Osanna in excelsis.　<天の非常に高いところに、ホザンナを!>

【第24曲　アリア(テノール)】
ロ短調　4分の3拍子　フラウト・トラヴェルソ、通奏低音
バロック・フルートのオブリガートを伴う優美なテノール独唱である。
Benedictus qui venit in nomine Domini.　<主の名によって来るその方に祝福がありますように>

【第25曲　合唱(2群の4部合唱による2重合唱)】
ニ長調　8分の3拍子　フルート、オーボエ、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
第23曲が繰り返される。
Osanna in excelsis.　<天の非常に高いところに、ホザンナを!>

【第26曲　アリア(アルト)】
ト短調　4分の4拍子　ヴァイオリン、通奏低音
ヴァイオリンの旋律に続いてアルト独唱が神の子羊(キリスト)を穏やかに讃える。
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:　<世の罪を取り去られる神の子羊よ、>
Miserere nobis.　<私達を憐れんで下さい。>

【第27曲　合唱(4部)】
ニ長調　2分の4拍子　フラウト・トラヴェルソ、オーボエ、ファゴット、トランペット、ティンパニ、弦楽合奏、通奏低音
第7曲がほとんどそのまま使われている。平安を願う祈りと神への感謝、トランペットの響きと共に輝かしく曲が終わる。
Dona nobis pacem.　<私たちに平安を与えて下さい。>